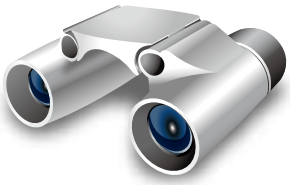

新宿区印刷業界の歴史と思い出

『勃興期から終戦まで 康文社印刷所時代を回顧して』

(1) 関東大震災を機に興隆する牛込地区業界

昭和 21 年に細川去り独立

史談会開催日：不明

■語る人
沢田 巳之助 氏
（㈶印刷図書館館長）

昔の新宿区、明治まで遡ると、当時の牛込区、四谷区などは閑静な住宅地、屋敷町で、工場らしきものはほとんどなかった。

工場進出の先鞭を付けたのは、秀英舎（大日本印刷の前身）で、市ヶ谷に約 5,000 坪の土地を入手し、明治 19 年に工場を建設したのが新宿区における印刷工場の先駆けではないかと思う。

その後、明治 40 年榎町に日清印刷が設立された。これは、早稲田大学の高田早苗という博士が主になって同地の 500 坪の敷地に工場を立て興したもので、早稲田大学出版部の仕事を主にするという建て前になっていた。当時、早稲田大学と日清印刷、秀英舎は深い関係にあったので、秀英舎の技術者がかなり入って同社を盛り立てたという経過がある。

従って、明治時代のこの地域には、秀英舎と日清印刷の 2 社位でその他にはほとんど無かったと思われる。

また、出版社も今でこそ区内に沢山あるが、当時はほとんど無く明治 40 年代矢来町に新潮社が出来たくらいのもの。

ぽつぽつ印刷社が出来てきたのも、秀英舎や日清印刷があり、その近辺に下請け専門で機械だけ据えてやるという形で、それもほんのポツリポツリという程度だった。

私が、現在の新宿区において印刷業に関係したのは、大正 10 年 11 月に、当時の牛込区、早稲田鶴巻町に康文社印刷所（吉原良三社長）が設立された時に端を発する。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

それ以前、有楽町にあった報文社印刷所に大正７年入社したのが印刷に足を踏み入れた最初だが、同社が大正９年８月の火災を機に解散することになり、そこの支配人をしていた吉原さんが得意先、社員を引き継いで、康文社印刷所を興し、私も同行しわけである。

引越すときに、私は自転車で鶴巻町まで行ったが、本当に場末の片田舎という感じで、ひどい所に来てしまったというのが実感だった。

康文社印刷所は、約 100 坪の土地に、既存の建物があったのを改築して工場にしたが、創業当時は従業員数 30 ～ 40 人だった。

２階屋だったが、２階は組版と文選の作業所、下は印刷、紙型鉛版、鋳造、断截といった具合に一応総合的な設備を整えていた。

牛込では、格は違うが日清印刷に次ぐ、２番目の規模を持っていたことになる。

大正 12 年９月１日に関東大震災が起こった。このときは、神田、日本橋、本所、深川、芝にかけて、火災でほとんどの印刷会社、出版社が焼失してしまった。

牛込方面は幸いにして火事も無く、たいした被害にあわなかった。従って、その震災を契機として印刷物が焼け残った印刷所に相当集中し、活況を呈することになる。その頃から、山吹町、鶴巻町、若松町近辺にもぽつぽつ印刷会社が増えてきたが、まだまとまった大きな会社は出来なかった。

大正 10 年の調査によると、日清印刷は従業員 483 名と規模もかなり大きく、設備も整っていた。その頃の秀英舎は、1,000 人規模位になっていたのではないかと思う。

震災による下町のほうの印刷工場の復興が遅れたため――印刷工場の復興というのは大変なこと――出版社としては一刻も早く本を出したいということで、牛込方面に仕事が流れ、殺到した。

そうしたことから、康文社印刷所もどんどん拡張し、70 ～ 80 名規模にまでなって牛込方面ではかなり大きな存在に成長していった。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

(2) 次第に活況呈す大正・昭和初期

当時の印刷関係業者の組織としては、明治 43 年 7 月に設立された『東京印刷同業組合』があり、共同印刷、秀英舎、凸版印刷などの大会社から小企業まで、一本化されていた。

大正 13 年に初めて支部制が施かれ、牛込支部が誕生したが、その頃の同業組合加盟社は、700 会社位のものだった。

大正 15 年 2 月に、同組合の代議員選挙が行われた。これは、従来の委任状による選挙を廃して行った画期的なものとして注目されたが、各地区の組合員数に比例（10 ～ 15 社に 1 人位の割合ではなかったかと思う）して、代議員が選出された。

この結果、牛込区からは秀英舎と日清印刷および康文社印刷社の吉原良三氏、四谷区からは有吉嘉兵衛氏が代議員として選出された。

また、同年 4 月には、各支部長が推薦され、牛込支部では、竹平興吉氏が就任した。同氏は、神楽坂で石版印刷をやっていた三吉印刷所の社長である。

昭和 4 年に代議員の改選が行われた。この時は、牛込が 5 名、四谷が 2 名の代議員となり、それだけ組合員数が増えてきたことを物語っている。

▽牛込区＝秀英舎 _、日清印刷 _、_ 康文社印刷所（吉原良三）、三吉印刷所（竹平興吉）、片岡印刷所（片岡弥三郎）

▽四谷区＝江川堂印刷 _（大澤音吉）、盛明堂印刷所（石塚精一）

その後、3 年に 1 度位の改選が行われ、昭和 7 年には、牛込区代議員に、秀英舎（青木弘）、日清印刷（平野登美夫）、康文社印刷所（吉原良三）、泰文堂（上田栄吉）、文越堂（野吾政五郎）が就任した。四谷区は、石塚精一、根本惣三郎の 2 氏である。

また、同年 6 月に新たに支部長推薦が行われ、牛込支部長には山崎鉄太郎氏が指名され、就任した。同氏は、確か活字の製造販売業関係の人だったと思う。四谷区は未定。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

さらに、昭和 10 年の代議員改選結果を調べてみると、吉原良三氏、青木弘氏（昭和 10 年に秀英舎と日清印刷が合併）、野吾政太郎氏の他に、中尾次一氏（中尾印刷所）、大杉直次郎氏（大杉印刷所）の両氏が選出されている。中尾印刷所は石版印刷、大杉印刷所は機械を 3 台設備しての刷り専門だったように記憶している。

四谷区のほうは、白井比義という人と、高橋弗図生の 2 氏。支部長としては、牛込支部長に大杉直次郎氏、四谷支部長に石塚精一氏が選任されている。

(3) 牛込・四谷地区の印刷産業事情

当時は、もちろん活版印刷が全盛であったが、しかもほとんどが小規模で、印刷機を 5、6 台も設備している所はあまりなかった。ちなみに、昭和 9 年 6 月に「東京印刷工業組合」が設立されたがその組合員加盟資格が、活版、オフ、石版印刷機のどれでも菊全版 5 台以上保有となっており、私の記憶では全部で精々 50 ～ 60 社位のものではなかったかと思う。牛込、四谷方面では、秀英舎、日清印刷、康文社印刷所の 3 社位のものだった。

昭和 13 年の東京印刷同業組合の名簿によると、組合員の内容は次のようになっている。

▼牛込区＝組合員 124 名
▽活版印刷…104 社
▽石版印刷…9 社
▽オフセット印刷…3 社
▽写真製版…5 社
▽活字鋳造…7 社
▽各種印刷…1 社

▼四谷区＝組合員 50 名
▽活版印刷…41 社
▽石版印刷…2 社
▽オフセット印刷…1 社
▽シーリング…1 社
▽紙器印刷…1 社
▽荷札製造所…1 社

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

▽浮出し印刷…1 社
▽各種印刷…1 社
▽紙型鉛版…1 社

各種印刷とは、一版種専業ではない総合印刷会社のことを言い、牛込区は大日本印刷 _、四谷区は日本紙業 _ の各 1 社のみだった。

私の知っている大正年代の牛込というのは、かなり辺鄙な所だった。康文社印刷所は、頁物印刷をやっていた関係上、紙なども全判で倉庫に置いておいたのだが、紙屋さんが持ってくるのは、荷馬車で、1 度に精々 30 ～ 40 連位といったのんびりした状態だった。

印刷業そのものの社会的地位も、今とは比較にならない位低いものだった。お得意先の言うことは、何でも“ご無理、ごもっとも”と言って聞かなければならない。

また、急ぎの仕事などがある時は、深夜までの残業といったこともザラで、近辺が住宅地のため、騒音防止といった面も気を使わなければならなかった。当時は、監督官庁というと警察で、近所の苦情が交番に行くと警察から厳重に注意されるため相当頭を悩ませた。

早稲田鶴巻町周辺は、明治の頃までは田んぼだったらしい。そのため非常に地盤が悪く、当時四六全判が 6 台位あったので、機械を据え付ける時には基礎工事が大変だった。松の杭を打ち込んだ上に 30 ～ 60 センチのコンクリートを打ち、その上振動の無いように、周囲に溝を掘ったりした。

また、その頃の動力は、今のように機械 1 台 1 台にモーターが付いているのではなく、1 台の原動機でシャフトを回し、その回転をベルトで機械に伝えるというものだった。シャフトもそれ以前の時代には天井にあり、ベルトを下におろしてやったものだが、康文社になってからは床に溝を掘って、その中にシャフトを通すようにした。安全管理の面でやや改良されたといえるだろう。

(4) 昭和初期円本全盛から深刻な不況へ

震災直後、罹災工場の機能が停止したため、活動している印刷会社において、料金上昇の傾向が出ている。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

活動出来る印刷工場に仕事が集中し、出版社としては発行を急ぐため、組版代にしても従来 A5 判 2 頁 1 円位だったものが、1 円 50 銭でも 1 円 80 銭でも良いからやってくれ、ということになるとやはり商売だから、値の良い方でやることになる。

時局に便乗したわけではないが一時的に料金が高騰し、印刷会社が儲かった時期であった。

しかし、一時期良かった業界もその後の反動で、次第に悪くなってきた。出版界も、それまでは立派な本を多く出していたものだが、次第に悪化して行き、その打開策として、昭和 1 ～ 2 年頃改造社が『現代日本文学全集』という A5 判 300 頁位の物を 1 冊 1 円で刊行した。

20 万、30 万部というレコード破りの刊行部数で、これが“円本ブーム”の幕開きだった訳である。これによって、急激な印刷部数増加という現象が起きたため、大手の秀英舎、日清印刷、共同印刷などは、競って輪転機を導入し、設備を増強していった。

その後、出版界全体が円本競争という状態になり、何十種という円本が刊行されていったため、昭和 5、6 年頃にはその反動から再び不況に陥り、出版界では相当数倒産する会社が出てきた。

その余波は、当然印刷業界にも回ってきた。

そこで、東京印刷同業組合では不況対策ということで、賃金の引き下げまで決議している。前述の東京印刷工業組合も、そうした不況対策のために誕生した訳である。

その主旨は、“不当競争を避け価格維持と安定を図る”ということにあった。そのため、工組では価格表を作って組合員に回し、組合員は権利確保のため得意先のリストを作って本部に申告したという事実がある。

この時期は一番不景気で、印刷同業組合としても、たちゆくためには労働賃金を下げなければならないということを決議した訳だがその時に約 1 割の減給を実施した。

当時の給料というのは、大体 10 時間勤務で、植字工が日給約 3 円、文選工が 2 円位、差し替え工が 2 円 50 銭位のもの。印刷工の場合は、

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

紙差しと紙取りに別れていて、紙差しは機械の責任者で３円位だったが、紙取りのほうは印刷して出てきた紙を揃えたりの補助的なもので、日給２円位のものではなかったかと記憶している。

大学を卒業しての初任給が 40 ～ 50 円で、それでもあまり職がないというのが、この頃の話である。

(5) 戦時体制に揺れる業界

空襲で一面焼野原→終戦へ

昭和も年月を経ていくうちに、日本全体が軍国主義の色調を強めていき、当然印刷業界もその影響の埒外にはあり得なかった。

昭和６年に満州事変、同 12 年には支那事変が勃発し、だんだん戦争に突入して行った。

そうした状況の中で、次第に物質も乏しくなり、紙も昭和 15 年頃からは配給制度をとるようになって行った。

従って、この頃になると、新規に印刷所を始めようという人は、もうほとんどいなかった。

昭和 17 年頃になると、印刷業の新体制運動ということで、『日本印刷文化協会』という全国的な統制団体が、情報局の肝入りで設立され、一元化されていった。

出版界にも、『日本出版会』という統制団体が出来、本を出すにもいちいち情報局に原稿を持って行き、３千部の認可を取るとか、２千部しか紙を貰えないとか、“これは時局に合うから１万部刷って良い”とかによって紙の配給を貰うことになった。

このように、非常に窮屈になった状況の中で印刷業も次第に押しつめられ、従業員にしても、赤紙１枚で戦地に召集されるとか、徴用にとられるなどの事態が次第に頻繁に起こって、さらに活動の幅が狭められていった。

昭和 18 年頃になると、いよいよ印刷業の企業整備が行われることになった。それによって、小さな印刷会社は、機械も活字も供出

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

せざるを得なくなり、それまで東京で3千社あったと思われる印刷会社が、整備の結果1千社以下に減少し、さらに残った会社も企業合同が進められて行った。

私の体験から言うと、康文社印刷所は、普段80名位、多い時で90名程の従業員を抱えていたが、戦争が激しくなると次々と応召、徴用でかり出されていって、補充が出来ず、昭和18年春頃になると、8台あった機械が2台動かせるかどうかといった状態になっていた。

植字も欧文、和文合わせて25台位の植字台があったが、その部門も年寄りなど4、5人位しか残っていない。全体で3分の1以下に減って、最後には20人もいなかったように思う。

総合的な設備を持っていたため、企業整備には引っ掛からず残っていたが、残るためには、軍の仕事も大分やった。例えば全5巻の立派な大南洋辞典（軍の南方政策のための大辞典）もやったが、そのためには大量の地金を必要とするということで申請すると、一度に5トン位の鉛をドンと配給された。何といっても軍事最優先の時代で、その力を見せつけられる思いだった。また、電通の発注で遠東易貿易月報というのも出した。これは河北など中国方面の政策のためのものだったと思うが、A4判のアート・オブ・ペーパーを使った立派なもので、内容は全部中国語というもの。これも毎月かなり大量部数印刷した。

要するに、小説とか、一般文学的な物などは影を潜め、次第に国策に沿うような物が幅をきかせていった訳である。

康文社印刷所の運命を見てみると、大正10年に創立して以来20年を経た昭和20年、陸軍の需品廠から設備買上げの話が持ち込まれた。需品廠では、軍に必要な印刷設備その他優秀な物を買い上げていったが、当時天皇陛下も大本営も長野県のほうに疎開するため大きな防空壕を作っていると言う話を聞いていたし、康文社の印刷設備は山梨県のほうに運ばれていったらしい。その時、機械、設備一さいを私が評価したのだが、当時の金で50万円位で買い上げられた。

その直後、私は康文社印刷所を退職したが、機材を全部運び出したすぐ後で、その周辺全部が強制疎開させられることになり、康文社の建物も兵隊が来て取り壊していったと言う。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries

昭和20年になると、東京も米軍機による空襲が一段と激しくなり、4月13日の空襲で牛込は神楽坂近辺新小川町、矢来下にかけて、全部焼き尽くされてしまった。

さらに、5月25日、風の強い日だったが、この日の空襲で焼け残った新宿、大久保方面から若松町、早稲田鶴巻町、山吹町一帯にかけて、ほとんど一なめに焼けてしまった。幸いに、市ヶ谷方面は被害を免れ、大日本印刷は残ったが、新宿近辺の印刷業は、ほぼ壊滅状態になってしまったといって良いだろう。

(C) Copyright The Japan Federation of Printing Industries